

特集 子宮筋腫のすべて

子宮筋腫の手術療法(1)

不妊症患者に対する子宮筋腫核出術の適応

原田 美由紀／大須賀 穰

Summary

子宮筋腫を合併する不妊症患者にしばしば遭遇するが、子宮筋腫が不妊症の原因となっているのか、また筋腫核出術を行うことにより妊孕性が改善するのかの判断は筋層内筋腫、特に子宮内腔変形を伴わない場合、十分なレベルのエビデンスがないため困難である。しかし、このような患者のなかには子宮筋腫が不妊症の原因の1つとなっている者も含まれている可能性がある。Cine MRIなどの新たな指標も取り入れつつ、手術を行うのか否か、行う場合にはいつ行うのが望ましいのかを患者ごとに慎重に方針決定する必要がある。

Key words

子宮筋腫
不妊症
子宮筋腫核出術
cine MRI

はじめに

子宮筋腫は生殖年齢女性に認められる腫瘍として最も頻度が高い。不妊症の有無に関わらず、過多月経や圧迫症状などの症状を呈する子宮筋腫が手術を含めた治療適応となることは論を俟たない。しかし、不妊症患者の無症状の子宮筋腫が手術適応となるか否かを考えるに際しては、以下の3点を勘案する必要がある。①子宮筋腫の存在は妊娠成立を妨げるのか、②子宮筋腫核出術により妊孕性が改善するのか、③①②に基づいて、その患者が子宮筋腫核出術を受けた際に妊娠成績の向上が見込まれるのか。また、子宮筋腫ならびに子宮筋腫核出術の周産期合併症に与える影響も考慮する必要があるが、これについては他稿で解説されるため、本稿においては、上記①、②すなわち子宮筋腫ならびに子宮筋腫核出術と妊孕性との関連につき文献的レビューを行い、つづいて患者ごとに手術適応を判断する際のポイントについて参考となりうる新たな指標を紹介しつつ議論する。

子宮筋腫と妊孕性

粘膜下筋腫や子宮内腔変形を伴う筋層内筋腫は、精子の移動、卵子の移送や胚の着床を妨げ妊娠成立に悪影響を及ぼすと考えられる¹⁾。特に2 cmを超える粘膜下筋腫は妊孕性に影響する可能性が高い²⁾。

子宮筋腫が妊孕能に影響を与える機序としては、このような解剖学的影響のほかに、子宮の異

Miyuki Harada

東京大学大学院医学系研究科産婦人科学講師

Yutaka Osuga

東京大学大学院医学系研究科産婦人科学教授